お茶の水音楽論集　第12号　2010年4月

［研究ノート］

1990年以降の日本の口琴研究

山下　正美

はじめに

1990-91 年には、日本の口琴研究において重要な発見が 2 つあった。1 つ目は、関根（1990）による文献研究から江戸時代の口琴に関する資料が見つかったこと、2 つ目は 1991 年 3 月に埼玉県大宮市氷川神社東遺跡から平安時代の鉄製口琴が出土したことである。平安時代の日本本土にも口琴が存在したという事実は、その後の口琴研究における大前提となり、これ以降、口琴研究の関心は、平安時代や江戸時代に存在した日本本土の口琴が誰によって、どのように使われたのか、また日本の口琴の起源に関する問題に集中するようになった。

では 1990 年以前の口琴研究はどうであったか。口琴といえば、日本の音楽学者によってこれ以前にもアイヌの口琴ムックリや、台湾や樺太（サハリン）など、日本本土以外の口琴が報告されていた。たとえば、1923 年に樺太（サハリン）を旅した田辺尚雄、台湾少数民族の音楽を研究した黒澤隆朝、台湾ブヌン族の口琴と和音唱法について研究した塚田健一（1980）、パプアニューギニアやベラウで口琴を収集し、さらには MHS 式楽器分類法に照らし合わせ、口琴の構造や発音原理について言及した山口修らの研究がある。これらの研究では、口琴という楽器の構造や、各民族の口琴の種類や名称、どういった場面で口琴が使われていたか、どの倍音が聞こえてきたか、といった点に向けられている。

近年の口琴研究では、音楽学だけでなく史学、考古学、民俗学等々の諸分野においても、資料が発見されないまま埋もれているのではないか、としばしば指摘されている。江戸時代以降、日本本土における口琴の存在はいったん忘れ去られてしまったため、楽器としての認知度はあまり高くない。新たな資料の発見には、これまでの口琴研究の成果を周知していくことも必要だろう。そこで本稿では、1990 年から現在までの約 20 年間に行われた口琴研究を整理し、最新の動向もまじえながら報告したい。

1. 平安時代の鉄製口琴

1991 年 3 月、埼玉県大宮市氷川神社東遺跡から平安時代のものとされる鉄製口琴が出土した。10 世紀頃の口琴となると、世界的にも古い時代の口琴といえる。発掘の概要は「大宮市遺跡調査会報告第 42 集　氷川神社東遺跡　氷川神社　遺跡　B-17 号遺跡―県営硬式野球場・周辺施設整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告―」（大宮市遺跡調査会 1993）に詳しい。

第 1 号口琴は住居跡の埋土内、第 2 号口琴は第 2 号総柱建物（おもに倉庫として使われる）の柱の抜き取り穴の埋土内から発見された。この 2 つの建物は隣り合っている。寸法

は全長 12.8cm、環部幅 4.2cm、弁の残存部の長さは 8.4cm、幅 0.6〜0.7cm である。また発見された住居跡からは、甕・坏・瓦・鉄器・砥石などが発見されている。これらはいずれも平安時代のものであり、同時に見つかった口琴も同時代のものと推定される。第 2 号口琴は第 2 号総柱建物の北辺側の柱の抜き取り穴から出土した。寸法は全長 12.4cm、環部幅 3.6cm、弁の残存部の長さは 7.7cm で、第 1 号口琴とほぼ同じ寸法である。

遺跡の調査報告によると、同じ遺跡から浄瓶などの仏前具やフイゴの羽口、小鍛冶炉なども見つかったことから、この口琴が同地で作られた可能性もあるということだ。また遺跡には当時、鍛冶師や巫女・陰陽師など神仏世界と関わりのある人々が住んでいたと考えられている（渡辺　1993: 439-447)。

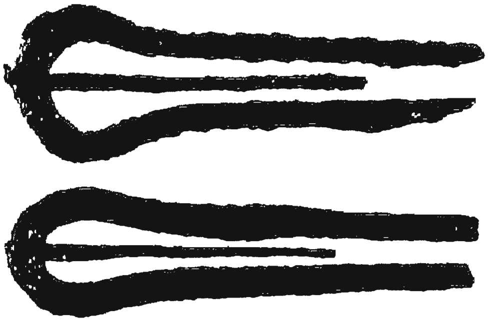

図 1
埼玉県大宮市氷川神社東遺跡から出土した鉄製口琴　（山形；渡辺　1993a: 12)
（上）出土口琴第 1 号
（下）出土口琴第 2 号

2. 江戸時代の口琴

関根（1990）は、江戸時代の文献を集めた『古事類苑』に、「口琴」の項目が含まれていることを発見し、ここにみられる江戸時代の口琴について研究した。関根（1990）によると口琴という名称は、中国の文献から輸入されたもので、ほかには津軽笛、口琵琶、琵琶笛、びやぼん、きやこん、シュミセンなどと呼ばれていた。さらに 18 世紀頃には薩摩で口琴が「吹物神事」に使われたという記録もみられた。「吹物神事」の詳細は明らかではないのだが、笛などの「吹物」を用いた「神事」ということだろうか。この記録を元に、平安時代の口琴も神事で使われていたのかもしれない、と考える研究者もいる。また 1823〜24 年には、江戸で口琴が大流行し、禁止されたという。口琴を使って、政治家の名前を風刺したことが､禁止の理由であったと考えられている。

ほかにも『古事類苑』に収録されている山崎美成、滝澤馬琴らの記録、北方を探検した菅江真澄、松浦武四郎らの著作にも東北地方、アイヌの口琴に関する記録が含まれている。

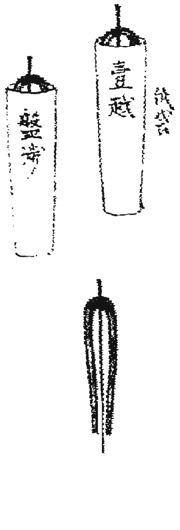

図 2 山崎美成『耽奇漫録』に見られる口琴
（山崎　1984 : 632)

特に注目されるのは、山崎美成の記録である。国立国会図書館蔵版の『耽奇漫録　上』、『耽奇漫録　下』（日本随筆大成・第一期・別巻、1993、吉川弘文館）で同書全20集を2巻に分けて収録した版本がある。これは、文政7年の5月より翌8年の11月にかけて、山崎美成を中心とする、好古、好事の者の集まる耽奇会において、会員各自が持ち寄った古書画、古器材などの珍品、奇物を展観批評したものの記録である。口琴は、『耽奇漫録　上』の第四集と第八集に掲載されている。第四集は文政7年（1824年）の8月13日、第八集は同11月14日に行われた耽奇会の記録で、滝沢馬琴を含む9名が参加した。ここから「壱越」「盤渉」と書かれた紙袋に入った口琴や（図2）、十二調子そろった口琴もあったことがわかる。

3. 菅江、松浦ら北方探検家による記録

『古事類苑』から、菅江真澄や松浦武四郎など、江戸時代に東北地方や北方へ渡った人物の記録中にも口琴のあることがわかった。菅江真澄（1754-1829）は、本名を白井秀雄という三河の人で、加茂真淵の門人植田義方に国学を学んだ。旅行家・民俗学者で、信濃・東北・北海道を遊歴した際には、津軽・出羽地方に滞在した。『ふでのまにまに』は、1789年虻田コタンで見聞きしたことの記録で、鉄製口琴の記述が含まれている。ここから、松前に漂着したロシア人の船に口琵琶があったのを浦人がもらって吹きならし、後に松前の鉄工が真似て作ったこと、津軽では盆の獅子踊りのときに笛太鼓にあわせて口琵琶を吹きならし踊ったということがわかった（内田；宮本　1971:71-72）。

また松浦武四郎（1818-1888）の著書の中にも、何点か資料がある。『北蝦夷余誌』は、松浦が1856年に行った樺太の調査報告である。ここでは、肩にかついだ斧に鉄製口琴をあてて鳴らすという珍しい奏法が記録されている。解説文から、これは本邦ではビハボンというもので、ヲロッコ、タライカ、ニクブン人は鉞を肩にして、それに持ち添えて口琴を鳴らす、すると鉞に響いて大変良いとされていることがわかる。

図3　鉄口琴を鳴らす図（松浦　1978: 795）

ヲロッコとは現在の民族名でいうウィルタで、タライカは多来加地方に住むアイヌ、ニクブンはニブフのことである。ニブフは、ニヴヒやニヴフなどとも記される。ニブフは黒竜江口（アムール川）および樺太の先住民族で、樺太アイヌ語ではギリヤークと呼ぶ。この斧を使った奏法については、田辺尚雄（1883-1984）も僅かながら記録している（田辺 1927：129）。

4. 近年の口琴研究

近年では、日本でも様々な関心から口琴関係の催しが多く開催されるようになってきた。

2005年10月に札幌で行われた東洋音楽学会第56回大会では、公開講演会「口琴の音を解剖する」（講演者・阿部和厚）および公開演奏会「北の楽器　トンコリ・ムックリ・ホムス」が催された。ホムスとは、ロシア連邦サハ共和国を中心に暮らすサハという民族の鉄製口琴で、大会ではキム・ボリーソフ（1982-）が演奏した。

また2009年には東京音楽大学民族音楽研究所主催で、第1回国際口琴フェスティバルが開かれ、コンサートだけでなく口琴製作ワークショップ、甲田潤による作曲作品の発表なども行われた。口頭発表では、伊福部達が「口琴の発音メカニズム―その解明と人工の声―」と題した発表を行い、福祉工学分野から人工喉頭の開発に口琴の応用が模索されていることを報告した。

おわりに

以上のように、1990年以降に行われている口琴研究では、平安時代の口琴や江戸時代の口琴に関する研究、さらには考古学、解剖学、音声学など様々な学問分野から研究が行われている。しかし、まだまだ課題も多く残る。例えば、平安時代の口琴については当時の口琴の名称がわからず、文献資料も見つかっていない。また平安時代から江戸時代にかけて、この間の口琴に関する資料は知られておらず、楽器文化としてはいったん途切れているのか、つながりがあるのか不明である。

口琴は、いわゆる日本の伝統音楽や民俗芸能の中で使われ続けてきた楽器ではないものの、近年の研究によって日本においてもその歴史の古いことがわかってきた。口琴は、台湾やアイヌ、サハリンに住む近隣の諸民族や、アジア、ヨーロッパに至るまで、広域に存在する楽器でもある。筆者は口琴に注目することで、これまでとは違った日本音楽史、さらにはアジアの音楽史が見えてくるのではないかと考えている。

また、今回は詳しく言及しなかったが、1990年以前に行われた口琴研究も注目される。田辺尚雄、黒澤隆朝など台湾先住民族の口琴について言及しているもの、また菅江真澄や松浦武四郎など北方諸民族の口琴について言及しているものは、歴史的記述としても貴重

である。これら日本側の資料と、現地での資料との比較研究も、今後取り組みたいテーマの１つである。口琴が歴史的、地域的、学問的にも広がりをもった楽器であることを認識した上で、今後の考察を続けていきたい。

参考文献

黒沢，隆朝

1973 『台湾高砂族の音楽』東京：雄山閣出版株式会社：285-344.

1994 『図解　世界楽器大事典』東京：雄山閣出版株式会社.

松浦，武四郎

1978 『覆刻　日本古典全集　多気志楼蝦夷日誌集　三』正宗，敦夫（編）東京：現代思想社.

関根，秀樹

1990 「幻の江戸口琴「びやぼん」」『口琴ジャーナル』No.1 日本口琴協会：22-25.

2003 『新版　民族楽器をつくる』東京：創和出版：124-132.

下村，五三夫

1996 「声をだすアイヌの口琴奏法および喉借り遊びの音声合成原理について」『小樽商科大学人文研究』第92輯：37-78.

1997 「江戸期の人の声を出す口琴とその練習譜について」『小樽商科大学人文研究』第93輯：89-113.

1998 「Where Did ‘Speaking’Jews-harps Cultures of Ainus Come From?」『小樽商科大学人文研究』第96輯：119-170.

直川，礼緒

1994 「日本口琴の源流」小島，美子；藤井，知昭（編）『日本の音の文化』東京：第一書房：465-484.

2006 『口琴のひびく世界』CD付属，埼玉：日本口琴協会.

田辺，尚雄

1927 『島国の歌と踊り』東京：磯部甲陽堂.

谷本，一之

2000 『アイヌ絵を聴く　変容の民族音楽誌』付属CD、北海道：北海道大学図書刊行会.

塚田，健一

1980 「台湾山地ブヌン族の口琴と和音唱法の起源」『東洋音楽研究』第45号： 170-127.

内田，武志；宮本，常一（編）

1971 『菅江真澄全集　第二巻　日記1』東京：未来社：127-128.

1974 『菅江真澄全集　第十巻　随筆』東京：未来社：71-72.

Wright, John

2001 "Jew' s harp" SADIE, Stanley; TYRRELL, John (ed.) *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* (2nd ed.), London: Macmillan: 13: 112-115.

2003 「口琴」『ニューグローヴ音楽事典』草野，妙子（訳）、柴田，南雄；遠山，一行（総監修）東京：講談社：448.

山形，洋一；渡辺，正人

1993a 「埼玉県大宮市氷川神社東遺跡の口琴―発掘の経緯と報告―」『口琴ジャーナル』No. 6: 4-14.

1993b 『氷川神社東遺跡　氷川神社　遺跡　B-17号遺跡―県営硬式野球場・周辺施設整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告―』大宮市遺跡調査会報告　第42集.

山田，光洋

2001 『ものが語る歴史1　楽器の考古学』東京：同成社.

山崎，美成

1993 『耽奇漫録　上』国立国会図書館蔵版　東京：吉川弘文館：232-233；652-653.

山口，修

1984 「口琴」『音楽大事典』東京：平凡社：891-892.

やました　まさみ

お茶の水女子大学卒業、同大学院修了。現在、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻在籍。